

## 平成20年度「立ち上がる農山漁村」選定事例概要書

◎取組分野：【交流】

- |             |                         |
|-------------|-------------------------|
| 1. 都道府県、市町村 | 沖縄県 <sup>いえそん</sup> 伊江村 |
| 2. 団体名      | 社団法人伊江島観光協会             |
| 3. 取組みの名称   | ヒューマンツーリズムで元気なふるさとづくり   |
| 4. 取組概要等    |                         |

### ◇概要

伊江村は、沖縄本島北部の本部半島北西9kmに位置する、ピーナツ型をした周囲22.4km、面積22.77km<sup>2</sup>の伊江島の一島一村の村であり、その中で（社）伊江島観光協会は観光振興により伊江村の地域活性化に取り組んでいる。

特に協会内民泊部会の129軒で「ヒューマンツーリズム」をキャッチフレーズに村ぐるみで都市との交流による地域経済の活性化を推進している。

伊江村は教育環境としては中学校までであるため、高校へ進学する者は親元を離れて本島内で生活する事になる。そのためこれまで使用していた子ども部屋が空く事になり、どうにかならないかということが話題にのぼり、長年懸案となっていた滞在型観光への利用、日帰りの修学旅行から宿泊体験への活用方法が協議された。そして、平成15年に実験事業として、4校358人の受入からこの民泊事業が始まった。

伊江村は観光資源に恵まれた島であったが、平成12年頃から観光客が年々減少している状況にあり、これまで観光は日帰り観光であったため、島内での消費も少なく、地域経済への波及効果も小さい状況であったが、修学旅行の受入要請を受けて、従来の「見る観光」から「体験滞在型」に対応するために、民泊事業の住民説明会を開き受入家族を募るなどの準備を進めた。その結果、村内の受入家族の家業（農業・漁業・商業等）のお手伝いを通して、島の暮らしを体験させることとし、希望者には国の重要無形文化財「伊江島の村踊」やサンシン体験等も企画し、地域文化の理解を深める機会も設けている。

平成16年度沖縄県農林振興対策事業（子ども交流対策事業）の支援を受けて「民泊事業基本体験プラン」を3コース策定した。「1泊2日コース＝家業体験+民家体験」、「2泊3日コース＝家業体験+民家体験（1泊）+民宿・ホテル泊」、「日帰りコース＝家業体験のみ」というように多種多様な家業体験をする民泊事業となっている。

### ◇活動の規模

項目	H15	H16	H17	H18	H19
修学旅行生	358	1,378	2,693	12,123	14,035
受入数	解説 単位：人				
民泊収入			36,437	101,400	160,057
	解説 単位：千円 民泊事業収入				

### ◇活用している地域資源

沖縄県北部の離島、伊江村は沖縄ならではの自生テッポウユリや南国のハイビスカスが咲き誇る自然環境、踊りやサンシン等の地域文化の活用や農水商業の家業を地域資源として活

かしている。

特に、昔ながらの「島らっきょう」を生産する農業の営みが残っている家があるかと思えば、担い手農家で若者のUターン者により大型機のトラクターに乗ってのさとうきび植付作業や葉たばこ収穫作業等を体験することができる。

#### ◇地域活性化のポイント

・民泊事業に取り組むことで都市との交流を図り、地域の活性化を図る。さらに、民俗芸能を活用する事により郷土の文化を再認識し、修学旅行生を受け入れたことで、高齢者の生きがいにもなっている。

また、この事業により民泊体験修学旅行生のリピート意識が高く、一般観光への波及効果と今後の伊江島の観光振興に大きな期待ができる。

#### ◇事業の今後の展開方向

・伊江島観光協会が取り組んだ民泊事業は、過疎離島である伊江村に1億円産業を生み出し、地域経済に貢献している。また、高齢者に対しても生涯学習の機会創設を行い、地域活性化が図られつつある。

・今後は、さらに村民と入村した子供達との交流の拡充を図っていく。

①ヒューマンツーリズムとして修学旅行生と島民相互の交流による地域活性化

②修学旅行生への第2のふる里としての伊江島の情報発信

③民泊事業の受入目標20,000名を達成するために受入民家のスケールアップ研修を開催し、元気な民泊事業として発展させていく。

